

Mark Elvin 著

The Pattern of the Chinese Past.

大谷敏夫

本書の著者 Mark Elvin 氏は、現在オックスフォード大学で中国史を担当する新進の研究者であり社会経済史を専攻している。氏は特に宋代以降の中国社会の変化―更に具体的に言えば、15世紀末から20世紀初の上海の市場構造や水利の問題につき強い関心をもち、G. W. Skinner 氏の著作「*The City in Late Imperial China*」に一文をのせしめる。ところが本書では、氏はその関心の範囲を全中国史に及ぼし「旧中国のパターン」と題して、氏なりの体系的な中国史像を構成しようとした。氏が本書の構想を立てたのは、ケンブリッジ大学の東洋研究学会にあった時であり、その後グラスゴ大学で経済史学の分野を担当していた間に企画をし、スタンフォード大学から出版助成金を得て本書を出版したと言う。本書の叙述に際して、氏は本書の意図に沿う研究を多数参考にした。その中でも特に Joseph Needham 氏の科学技術史、G. W. Skinner 氏の市場構造論、Radha Sinha 氏の「high level equilibrium trap」の概念、斯波義信氏の宋代商業史研究、星斌夫氏の漕運交通に関する研究、Rhoads Murphy 氏の明清経済

の研究、Tom Metzger 氏の清代社会の官僚制と商人の地位等々の研究は、氏の立論の根拠となっている。

氏は本書研究の理由として、世界で人口の尤も多い大國であり、三千年にわたる公式の記録をもつ中華大帝國の社会経済の發展についての満足した史書がないことに気が付き、ここから著者自身が過去の中國に關する社会・経済史のパターンを提示せんとするのである。その場合著者は特に次の三点に留意したという。すなわち①ローマ帝國やその他の古代・中世の歴史の帝國が崩壊したのに、何故中華帝國は存続し得たのか、②12世紀の中國經濟を世界で尤も進歩させた要因となった一連の中世革命の本質は何か、③14世紀になってそれまで經濟的に進歩しつづけていた中國が、その技術的進歩のペースを維持するのに失敗し行きづまったのは何故か、とのべ、結局著者は中國が産業革命をなし得なかつた点に最大の焦点をあてている。この問題関心のもつ意味は重要だが、著者の研究がそれを克服しえたかどうかということについては、本書を解説する中で徐々に明らかにしよう。

さて本書の構成はその研究目的に則して次の三章から成りたっている。

- 世界最大の持続國家の形態
- 中世經濟革命
- 技術變化なしの經濟發展

第一章は、二・三章を論証する前提として、著者の意図に従って中國史を通観したものであり、これを更に八節に分けている。①帝國とその規模②初期中華帝國③紀元後三世紀の危機④華北におけるシナ異民族の合成⑤中期帝國⑥封建主義なしの莊園主義⑦鉄・火薬とモンゴル⑧明朝下の logistics = 兵站業の優越

性

この第一章の叙述に際して、著者は統一中国の原理を専制権力の経済的軍事的機能の中に見ようとしている。それを著者は、ヨーロッパ・オリエント史との大胆な対比を通じて説明しようとする。すなわち秦漢帝国とローマ帝国は土地制度や兵制面で類似点を有しており、然も両者とも異民族の侵入を受けて崩壊したのにも拘らず、中国には再び隋唐帝国の成立を見たのは何故かとい、その答えとして、中国は軍事・経済・組織等の技巧 *technical skills* において周辺民族より進歩していたので、結局は彼等と同化し得たのだという。この点は、隋唐帝国とビザンチン帝国の対比に於いても言えるので、ビザンチンの Theme 制―すなわち軍事奉仕の代償として租税を免除されて土地を所有した *soldier farmers* 農民兵士の存在が唐代の兵士の貯蔵所 *reservoir* としての均田制と類似していたが、両者とも周辺異民族との争いの結果発生した外人部隊による傭兵制の発達につれ崩壊する。しかし中国では再び周辺異民族を圧倒する経済力をもった宋朝の出現により統一を回復する。この宋朝はヨーロッパ史との対比で考えるならば、中世荘園制と比較し得るといふ。しかし宋代の荘園制ではヨーロッパのように荘園主は封建領主化しなかった。その理由は国家が広大な中華帝国を維持する必要上、防衛機能を統制していた点にあると考える。宋代の荘園主は土地所有者ではありえても、専門的な軍事階級のメンバ―でなかったため、封建的な上部構築が実現しなかったという。一時五代に軍閥が政権を握ったが、それが領主権力になるほどには成長せず、宋朝の出現によってその軍事権は中央に回収され文官統制下の国家となった。しかし財政

的な見地からみると、荘園制の発達により、富が荘園主に集中して中央政府の財政が弱体化し、宋朝の行政・軍事面の機能が弱まると共に、宋代の進歩した軍事技術を導入したモンゴル族に征服され、宋朝は滅亡した。モンゴル帝国は、宋朝の鉄・火薬などの技術をモンゴル固有の騎馬戦法と結合し、更に宋朝の水軍等の戦法を用いることにより、強力な軍事力を構築し、大帝國を建設したが、一方、その領域の拡大に伴う戦費の支出によるインフレ経済のため、モンゴル帝国は内部崩壊し、漢民族の復興が実現する。この結果成立した明朝は、宋・金・元の高度な軍事技術・戦法を継承すると共に、万里の長城を修築することによって北方への防備を完成し、一方大運河増修などにみられる国内輸送体制の整備も進行し、ここに高度な *logistics* 体制が完成する。しかしこの体制も、15世紀中頃以降から主に辺境地帯に於いて創設されていた屯田制が屯田農民の逃亡のため有名無実化すると共に異民族の侵入が激化し動揺する。この混乱に乗じて侵入してきた清朝は、この *logistics* 体制を継承し、それを拡大して露英と対決した。しかし18世紀頃になると民衆の中に政府の禁令にも拘らず *bandits* が徐々に拡がっていき、民衆の自衛機構が成立すると共に、中央権力の統制が弱まってくる。従って19世紀中頃の阿片戦争に始まる一連の外庄に際して、清朝は対決よりもなるべく講和を求めようになり、ここに列強の勢力を防守するための *logistics* 体制は弱体化していき、清朝政権はひたすらその権力を維持するため内部鎮圧のみに専念するようになったという。

以上が大體、著者が第一章でのべんとした概略であるが、主に軍事的側面より中華帝国の統一性を明らかにしようとした著者の意

図は理解しえても、それを経済史の主要な側面である土地所有の問題と関連させようとした著者の方法論は必ずしも成功せず、その通史としての展開にちぐはぐをもたらし、論理に一貫性がないところがこの章の最大の欠点である。著者が土地所有の問題を関連させようとするのは、第二・三章の伏線として必要なためだと思ふが、それならば、もう少し各時代につき土地所有と軍事機能の關係に焦点をあてて分析してみる必要がある。例えば宋元期の叙述に於いて典型的にあらわれているが、宋代で荘園制を論じておきながら元朝ではその展開の跡を全くふれず、軍事技術の叙述に終始している点など読者をして迷路に追いやるようなものである。

但著者が中国統一政権存続を理解する鍵として軍事的機能を重視し、それを中国が領土化しなかったことと関連させたこと、更に明清期に発達した *logans* 体制に注目して叙述した点は、ユニークな見解をもっている。というのは中国統一政権存在の理由を君主専制政治による水利事業に求めるウィットフォゲルの研究、或はアジアの生産様式を基盤とした専制権力と奴隸的農民の關係で論じるマルクスの研究、或は専制権力の家産的官僚制にその根拠を求めるウエーバなどの研究などがあるが、更に別の角度からの研究が望まれている以上著者の研究もそれなりの意義をもっている。

次に著者が好んで用いる比較帝国論の濫用は、今日中国史研究において考慮の余地のある点である。日本の学界に於いて西洋の資本主義発展を基準として中国史の発展を見ようとする比較史学の方法論は批判され、今日では中国史の展開の中からその発展の契機を探るのが一般的になっているのも安易な比較が陥入る危険

をいましめるためであった。勿論筆者は世界史の発展法則に依拠しつつ同時代の世界帝国の社会構造を対比しつつその関連性を追求し分析することを否定しているのではないが、そのためにはそれぞれの社会の特質を種々な角度から十分分析することが必要であろう。それから今一つ重要な問題点は、著者が十分な学説整理を行なわないで、中国史の重要事項を述べていることである。特に魏晉南北朝から唐宋の変革期にかけての土地制度の研究は、大きな論争の焦点となっており、時代区分に係る問題を含んでいる。

著者は、唐代までは主として堀敏一氏の均田制の研究〔東洋史研究 14・2〕に依拠して、均田制は漢帝国崩壊後にあらわれた国家による個別的な人身支配の再編成とみなしているようである。ところが均田制は中国農業生産の中心地江南では必ずしも確立しておらずそこでは大土地所有者（豪族）による奴隸的農民が存在しており、これが八世紀以降、身分的に解放されて宋代以降の小作の農奴が出現し、彼等を支配する組織として成立したのが荘園制である」と規定している。ここから著者は、宋以降の大土地所有制を荘園制、*manorialism* もしくは農奴制 *serfdom* と規定し、大土地所有者を *manor owners*、農奴は *tenant serfs* と翻訳しているが、これは著者が宋以降の大土地所有制を一面中世ヨーロッパの荘園制に比定する必要上の当然の結果である。この視角に立つ著者の宋代土地制度についての認識は、専ら周藤吉之氏の均田制の崩壊過程の中から大土地所有制（荘園制）が出現し、均田農民は没落して大土地所有者（荘園主）に隷属する農奴（佃戸）が出現するという研究〔宋代経済史研究〕等に依拠して論を展開している。ところが周知のごとく魏晉南北朝から唐宋期にかけ

ての土地制度研究として、宮崎市定氏は、中世（魏晉南北朝から隋唐）一円的な大土地所有者（莊園主）に隷属していた部曲が徭役的農奴であり、ここにこそヨーロッパ中世的莊園制のイメージがある。ここから北魏から隋唐にかけて成立した均田制はそれほど過大評価されない。そして唐代から宋代にかけては中世莊園制が崩壊して、零細化された分散的な土地所有制が成立し、ここでは地主と小作人（佃戸）の關係も身分的よりも契約的に変わってきている。小作人は逃移の自由を有し、その権利も法制的に認められている。従ってこのような宋代以降の土地所有制を莊園とはよばないし、ここから近世が始まると考えられる。更に近世の佃戸は、一面において企業家的な性質を有する点があり、そこから一田兩主制も発生したのであるとべいられる（『東洋史研究301』部曲から佃戸へ（下））が、近世における土地の二重所有關係（田底権Ⅱ所有権と田面権Ⅱ耕作権）の問題は、宋以降の土地制度を研究する上に見のがすことのできない要素であり、佃戸は請負い制によって土地の耕作権を取得していったという宮崎市定氏の説は示唆に富んでいる。ところで著者が莊園制下において管理・経営機構の分化・複雑化と共に、小作的農奴の自立の要素が深まったと論じているところをみると、論の展開としては宮崎説に近い部分が多い。これは著者の研究目的である宋代の一連の經濟革命を説明する場合には、宋代を自給自足的な農奴制で把握するよりも、土地所有の分解・経営の分化・商業資本の発達というように近世的概念で考えざるを得なかったからだと思われる。しかし著者は宋代を農奴制と規定した以上、その消滅を考えざるを得なくなりこれを明清期に求めようとするのであるが、その

論理的必然性はどうしても稀薄にならざるを得ない。この点については後述しよう。

第二章は著者が唐宋期の社会・經濟・技術に渡る諸改革（著者は革命という）が、中国の經濟水準を当時の世界で尤も高度なものとした点であると考え、これを⑨農業革命⑩漕運革命⑪貨幣・信用革命⑫市場構造と都市化革命⑬科学と技術革命に分けて考察する。そこでまずこれらの諸革命の様相を順を追って明らかにしておこう。

⑨農業革命、中国農業は8〜12世紀の間に江南を中心として大きな変化をとげたが、それを中世ヨーロッパの農業と対比しながら説明する。ヨーロッパでは地中海地方から森林地帯へと農業は拡大し、斧・くわ・馬などが技術向上の道具となったのに対し、中国では華北の畑作地帯から華中の米作地帯へ農業の中心は移動し、ダム・水門・水車・ポンプなどの灌溉設備の向上がみられたと両者の農業技術の相違を説明しているが、いずれも莊園がこれら農業技術向上の源泉であったという。そこで中国農業革命の様相をまとめると次の四つになる。①農民は改良道具・肥料の使用等々に関する農業知識を学んだ結果、効果的な土地利用をなし得たこと、②品種改良により大量生産や二毛作が可能になったこと、③水利灌溉網が整備されたこと、④商業の発達により商品農作物の生産がより可能になり、また資源の開発が促進されたこと。すなわち著者は、農業知識の普及・品種改良・水利・商業の発達の四面より宋代農業革命を分析し、その結果13世紀までの中国は世界で最もすぐれた農業であったという。また著者は、この時代の商業活動と都會化はこれら農業生産の基底によりなりたっていた。

ところで全国的にみれば、農業発達には地域差があり後進地域を先進地域なみに引上げる努力がなされることにより全生産高は暫くの間は絶えず上昇していた。しかるに人口増加に伴なう耕地不足は清中期以降穀物生産に限界をきたすことになり、新しい開墾地の必要性が生じてきたとのべている。

⑩漕運革命、著者はここで水陸輸送と伝達の革命が、農業革命と同様に中世経済革命を推進する上で重要であったし、またこれが中国の統一化を可能にした要因であるという。特にかい・ともがい・長大なオール等々の舟の技術の発達に伴なう水上輸送の発達は、これまで別々にあった水路システムを一つに結合化し、この時代の全国的な市場形成に重要な役割を果たした。そして漕運事業経営の複雑化に伴って運送仲買人等各種の漕運業者が出現する。

⑪貨幣・信用革命、宋代に銅銭が海外へ特に日本や東南アジアにまで拡がった状態に着目し、このような宋代の貨幣流通の進展の原因は、高い農業生産力と改良された運輸機構に基づく地方的に相互依存した中国経済の成長であるという。ここで著者が述べているこの期の通貨問題や信用取引については、単なる状況説明に終っているので省略しておく。

⑫市場革命、唐宋から宋初にかけて商業化された農村経済に結びついた地方市場の組織が育成されたこと、これら地方市場が全中国経済を結びつけるより高い市場の国家的ヒエラルキーの基礎になっていったという。ところでこれら地方市場の中心は都市であるが、著者はこれら中国の都市が中世ヨーロッパのより小さい都市と同様な歴史的役割を演じなかった。ヨーロッパの場合、都市は荘園（領主）と政治的・個人的自由を求めて抗争したが、中国

の都市は統一帝国を構成する要素として都市の独立性は存続しており、農村はこれら都市に余剰農産物を提供する市場となっていたという。かくして著者は「中国とヨーロッパが相違している基礎的な理由として、中国では連続した統一帝国構造の存在が、真の封建的・政治的そして軍事的構造の発展と同様に独立都市の発展をも不可能にした点にある」と述べている。

⑬科学と技術革命、10〜14世紀間、中国は組織的に自然の経験的探究を行なう程に進歩し、世界最初の機械産業である印刷術を創造している。数学・天文学・薬学・冶金術・兵学等々の研究が進み、それ等の基礎テキストを編集・印刷する政策が宋政府により推進された。また科挙制の実施により登用された宋元の官僚は詩文だけでなく実用的な知識をもっており、政策の実施に貢献した。このように宋代では科学と技術の研究は国家の奨励もあって盛んであったが、ある水準以上には進歩がなかった。中国に産業革命がなかったのは、科学的知識の欠乏や、技術改良の不十分さといった表面的な理由でなく、もっと深い要因があるうというのが著者の見解であり、これを次章で分析しようとするのである。

さてこの章に関する筆者の感想を述べれば著者が中世経済革命の様相として列挙した各項目は、それぞれより詳細な研究があり別に目新しいものではないし、また宋代の経済は当時の世界で尤も進歩した段階にあり、それが産業革命に到らず行きづまったため、逆にヨーロッパに先行されたという見解そのものは、既に宮崎市定氏の「東洋的近世」（教育タイムス社）などの著作に述べられている。ただ本書のごとく主として技術革命の観点からそれぞれの要因を分析し、それらを経済革命の型としたのは恐らく本

書が始めてであり、その点においてユニークなものはある。

第三章は⑭14世紀の転換期⑮農奴制の消滅⑯農村市場と農村産業⑰量的な成長と質的な停滞⑱結論に分けられる。著者はここで、何故中国は14世紀になって経済的な進歩は尚継続していたのに、技術上の進歩のペースを維持することができなくなったかという疑問を投げかける。この章の論題でもある「技術変化なしの経済発展」Economic development without technological change というのが、著者が尤も強調するところであるが、そのような状態を作り出した要因として、農奴制と荘園秩序の分解・市場町の複合化が、大部分の郷村の産業化の原因・結果であったこと・自分の費用で産業資本を創り出すのに失敗したことに對するありきなどの説明が不完全であること、だから新説として技術発明が、高度平衡の行きづまり high level equilibrium trap の経済の確立によって抑制されたことを説明しようとするものである。以下順をおって要約をのべておこう。

⑭14世紀の転換点、著者は中世経済革命以来のダイナミックな特質が、14世紀以降いかにして消えたかということを説明するに当たりますその背景として①新開地に拡大していた経済が、人口・資源の面で飽和状態に達したこと②海外貿易と外国人との接触が減少したこと・中国经济は一時的に多く必要とした外国銀の供給を否定し、中国社会は内部への関心に向ったこと③自然に對する哲学者の態度が転じたこと。組織的な調査への関心は、内省と直観に對する信頼によって短絡させられたこと。それ故生産技術における進歩を刺激する科学上のいかなる進歩もなかったこと、の三点の傾向を指摘している。

まず人口と資源が生産力に与えた影響について、著者は中世経済革命の始めに華北から多くの移民を吸収しえた江南地方も、その終りには飽和状態に達し、まだ人口の比較的稀薄な地方・華南・各省の境界地・東北(満州)などに再移住を開始する。江南などの先進地域は人口密集度が高くなりその結果生産向上のための技術進歩は停止することになるが、逆に後進地は人口が稀薄なるが故に最小の労働で最上の技術を用いる余裕が残っていた。

次に貿易の面からみるならば、中世の経済革命の期間を通じて中国と南アジア・イスラム世界との接触は拡大していたが、一方では政府が貿易による収入を財源とする必要上もあって官許以外の中国商人の個人的海外貿易を統制する政策をとったことにより、常に海外進出をめざす船乗り seafaring folk 族のエネルギーは政府軍との抗争に向けられていた。中国で沿岸貿易における政府の禁令を拒む力をもっていた唯一の階級である地方郷紳 local gentry も時として海上商人 seagoing merchants を当局に海賊として訴え、必ずしも個人貿易商人を擁護しなかったことも政府の統制を強化するのに役立った。この点が私貿易をも含んだ形で海外進出をなしたとげた西洋諸国と相違していたとのべ、ここから著者は中世経済発展の勢いを支える唯一の道は、ヨーロッパのごとき力強い海外発展であったらうにそれをなしえなかった中国经济が行きづまるのは当然であったと考えた。

次に自然現象の概念の変化と題して、宋学(性理学)に於いては人間性と自然の規範的原理を科学的に究明することを哲学的課題としたが、陽明学は単に人の良心の由来物であるとした。ところが17世紀における尤も秀れた科学的思想家であった方以智は、

ジュネイトによりもたらされた科学的知識に興味をもち、自然現象の性質について鋭い説明をした。方以智は道德的解明よりもむしろ知的なものを追究した。しかし方以智も大局的には自然現象を心・精神の問題として把握しており、ここから西洋の科学精神は生じなかった。

さて著者は14世紀の転換期を経た中国が、いよいよ進歩を続けながらも技術向上が見られなかった社会の状態につき、主要なパターンとしてまず農奴制の消滅後の農村社会の変化に重点を置いて説明する。著者によれば、明代清初までは農奴制 *serfdom* と農奴の小作制 *serf-like tenancy* にまつく荘園の秩序は支配的であったが、18世紀には消滅し、地主 *landlord* や質屋の主人 *pawnbroker* が荘園主 *manorial lord* にかわり、また財政関係が身分にとってかわった。そして農村でプロジェクト（即ち水利など）を推行する多くの郷紳 *gentry* は、土地所有者としてよりも職業的な管理者 *manager* としてあった。このように荘園制の解体に伴って登場してきた郷紳は、土地からの収益のみを固守することなく、高利貸・投機などの商業資本による農民への搾取を強化した。この背景として中世経済革命以後発達してきた地方市場の発達があり郷紳はこのような都市に居住する不在地主が多かった。一方、今まで身分的に地主に隷属していた農奴は徐々にその束縛をはなれ、地主との関係はより契約的となった。農奴達は横の連合をはかり、階級としての共通の利益を追求することになり農民反乱を起した。かくして農奴は土地を耕作する田面権を獲得し、地主は田底権をのみ有することになる。このような農村の変化の中から登場してきた富農 *rich peasants* は、地主と違って

小作科を集めず、小作労働を搾取しなかったが、貧農への貸付と利息・または余剰食物の販売などを通して資本を蓄積し、ここに資本家的・準地主的性格の富農階級が形成されていく。

かくしてこの節では、著者は水利事業にみられるように、荘園制のもとでは大土地所有者がその事業の主体であったものが、その崩壊後に於ては、官の監督下における職業的事業担当者としての郷紳層の役割を重視した。そしてこの郷紳層は必ずしも土地所有者とは限らず、土地の管理者であったり高利貸・商人層でもあったという。また農民層分解の中から生じてきた富農も商業を営んだり宗族、寺院、会館所属の土地を集約的に管理することにより富を蓄積し郷紳と共に農村の支配層を形成してきたと考えた。

ところでこのように土地所有者よりも商業資本の活動を重視するならば、当然それを可能にした市場と産業の問題を分析する必要があるであろう。中国の市場と産業の関連について、著者は、中国では全体として巨大な産業は、生産単位 *unit* のサイズを上げないで、流通機構を通じて多くの小生産者を結びつけていたという。そして農村産業は、急激に増加する高度の市場網を通じて経営された。そしてこの網を通じて材料や取引先を供給していた都会産業は、より多くの雇傭者を把握する新しい構造を発達させた。ある意味ではこれは進歩である。しかし組織の方法は生産組織から商業組織を分離させていた傾向があり、ここから中国が産業革命に向っていたという確証はえられない、とのべ、著者は特に生産と流通機構に一貫した組織的関連がなく、生産に関係のある農民・職人と、市場に関心のある地主・商人との間に、種々のギャップがあった点を指摘し、このような経済組織の特色が、中国におけ

る産業技術の進歩をにぶらせたという。

さてこの生産と流通の分離傾向という著者の指摘に基づいて展開された理論が、⑩量的成長と質的行きづまり、Quantitative growth, qualitative standstill,である。こゝでまず著者は、後期伝統中国で産業革命をなしえなかった理由として、Incurse等の主張する資本の欠乏が低い生産性を導き、それが低い所得をもたらし、それがまた資本を欠乏させるとして一種の低度平衡理論を批判し、中国には商品にとつての大きな消費市場もあったし、商人による資本の集中もみられるとし、塩商や行商の例をあげて説明している。それでは中国において商人がなぜ生産手段に投資することを喜ばなかったかということになると、一つには経済成長を妨げる政治的障害物があったという。すなわち政府の取奪・それ以上に暴動を鎮圧する政治力の欠如により、商人は富を集中して生産に投資するよりも、それを分散すること、また自らが官僚になることにより富の安定を図るが、その結果、官に課せられた禁令を遵守せねばならなくなり、生産技術の改善への熱意を失いその富を文化的行事に使用してしまう。しかるに著者はこの事實は産業革命を阻害する決定的な要因でないという。というのはこれまで検討してきた後期伝統中国(明清)の経済構造―農奴的保有権の状態の衰退、地方的市場網の稠密化、質屋・送金銀行・ギルド商人の成長、害虫退治の組織的手段等々の諸様相は、いずれも産業革命を準備するものである。ところがこれら様相が凡て存在しているのに何故技術向上の作用が起らなかったかということであるが、これが本書の主要課題である高度平衡状態の行きづまり high level equilibrium trap ということである。この行き

づまりを生み出す要因として、著者はいかにして資源・資本・労働の利用性が、後期伝統中国における中国の企業家の決定に影響したかということを分析する必要を説いている。ここで著者は人口の増加に比例して燃料・銅などの鉱産資源や原料などの資源が不足してきた点に注目し、そのため生産規模は限定され技術の停滞に決定的な影響を与えたという。また、人口過剰地域(江南など)における一エーカー当りの農業生産高をみると、多量の労働力の投入により、進んだ農業技術を投入した程度にまで高くなつており、それ以上の向上は不可能であった。そこでこの対策として政府は18世紀中よりしきりに人口移動を奨励したが、この移民に典型的にみられる量的変化は、農業経済における技術向上などの質的変化を伴わないで生じてきたところに農業の停滞があったという。

かくして著者はこのような状態について次のようにいう。すなわち「この農業における下降的過剰、そして個人的収入や個人的需要の下降、安価な労働と、増加していく高価な資源と資本、農業と輸送技術は非常によいので、いかなる簡単な改良もなされなかったこと、等々によって農民や商人にとつての合理的な対策は、労力節約の機械よりもむしろ資源や固定資本を有益に用いる方向をめざしたと思われる。巨大にして停滞的な市場が創造性を増進させてきた生産組織におけるいかなる隘路ともならなかった。一時的な欠乏が生じても安い輸送に基づく商業の可転性が、機械化の計画より以上に早く確かな救済となった。この状態を「高度平衡の行きづまり」と記すことができる」という。

それではこの行きづまりはいかにして打破できるだろうか。著者の見解では、それは中国が19世紀の中頃、世界市場にこの國を

開いたことが、列強と接触した上海等々に急速な商業的・産業的成長を導いた。外国機械を導入した上海の紡績機械会社等が現代中国の企業の基礎になったという。また汽車・汽船の交通機関・電信・電話などの通信機関の導入が、伝統的な市場網を打破し、生産構造に変化を与えたことになる。かくして著者の見解では、高度均衡の行きづまりを打破し産業の近代化を推進せしめたのは、列強のもたらした産業技術・組織ということになる。著者自身の結論は単なる予見であり将来の研究をまつと言っているが、実はここところが読者が尤も知りたいところであろう。

この章を通読しての感想をのべれば、著者のいう宋代中国が到達した高度な経済構造・産業技術が、14世紀の転換点を境に量的な進歩はあっても質的な面で行きづまり高度な平衡状態を維持し続けたという見解は、結局は中国社会を停滞したものとしてとらえている。著者は中国史を生産関係・階級関係の矛盾により展開する発展史観として考察するよりも、各社会・経済の特質を抽出して、それが進歩する過程を分析することに重点を置いている。その場合、その特質が尤も顕著に現われているのが、技術水準であり、それを活用する産業構造である。この技術を経済革命の基底に置く著者の発想は、技術の発達程度こそ人間社会の進歩を量るバロメータであり、それが生産力・生産関係・社会構造に及ぼす影響を重視したからである。技術のすばらしい進歩を示した宋代社会は、高度な経済社会であったという彼の視点は、少くとも中国を経済的におくられた地域とみる見方を否定している。

しかるに宋代に到達した高度な技術水準が著者の言う14世紀の転換期以後、均衡したまま行きつまったのは、技術進歩を阻む産

業構造上の要因があったとし、人口と資源と生産力の関係を論じている点は、本著のメリットとなっている。中国の人口増加は清朝に入って深刻になり始め識者の関心を喚起した。嘉慶期の洪亮吉はこれ以上人口が増加すれば自給できない食糧危機に陥ると警告したが、包世臣は人口が増加しても、その労力を利用して荒地の開墾が進めばその危険はないと反論したが、著者はこの論争に注目し農業生産における労力・技術の投入と土地利用の問題を分析している。著者は、前近代の中国では農地に対する人口の割合は限界を越えており、技術改善なしには生産力の増加を望めないという「L. B. Pease」氏の説に対して、人口の増大が一個当りの低収入をもたらし、土地利用の技術は最大限に達しているのでそれ以上の農業技術の改善も不可能であったと考え、農業労働力が生産性の限界を越えた段階ではいかなる技術改善もあり得ないとする。ここから中国の経済が高度均衡のまま行きつまったとするのが、著者の見解であるが、この結論は問題があるにしてもそれに至る分析のもつ意味は重要である。清中期以降の社会経済史研究を、土地所有と農民運動の面のみ焦点をあてて研究する限り、その実態は十分に把握しえなかつたのであり、その点、著者がこの時期の最大の社会問題であった人口・資源と生産力の問題を明らかにしようとしたのは示唆に富んでいる。但、問題は人口の増加・労働力の増加による土地生産性の限界・技術停滞というパターンだけでは、中国の社会発展の法則を把握しきれないのであり今後の研究は著者の提示した問題提起をどのように社会経済史研究者が活用するにかかっている。

次に著者は中国農村社会構造の転換期を14世紀とし、宋以降に

成立した荘園制・農奴制は18世紀までに消滅したとし、農奴は解放されて自由農民となり、郷村は土地所有者としてよりも管理者としての色彩の強い郷紳に支配されるようになったと考えているが、これを一・二章との連関でみれば、形態的には論旨に一貫性はあっても、実際には合致しない部分が多く論理の破綻が随所にみられる。例えば著者は前章で宋代の佃戸がかなり自立した面があるのを説きながら、この転換期以後ようやく身分的な面が解消して契約的になり、ここにこそ農奴制の消滅がみられたとしているのはおかしい。これはおそらく著者が傅衣凌氏の「明清農村社会経済」研究に依拠して傅氏の言う「非身分制地主」すなわち身分的特権を持たない在地の手作地主層の自立性と商業活動を重視したためであると思われるが、それならばもう少し学説を整理して著者の意図を明らかにすべきであろう。ところで明清期において土地所有関係・税制の面で変革があったとみるのが最近の学界の傾向であり、著者が明清の変革を重視するならば当然この方面の学説整理をする必要があった。明代土地所有関係の研究としては、明末清初の江南における地主・佃戸関係を明確に分析した小山正明氏の労作『史学雑誌66・12、67・1』明末清初の大土地所有があるが、ただ奴隸的農民が自立的な農奴へと発展するというその発展段階規定には多くの論者の批判を招いた。この土地所有関係の変革に関係した里甲制を始めとする徭役がどう消滅していくかということが明清国家の社会経済を研究するための基本的課題であるが、この点著者はほとんどふれていない。一般に明清期的一条鞭法から地丁銀に至る税制の改革を通じて土地所有関係にも変化が生じ、清朝雍正期になって国家権力に委任された郷紳

支配による地主制が成立したと考えられる。ところが著者はこの郷紳を土地所有者としてよりも、もっと幅の広い商業資本をも掌握した郷村の有力者と考えた。その背景には宋代以降の市場の拡大・貨幣や金融制度の発達などがあったからであるとする。また農民層の中から富農が現われ余剰農作物の販売、高利貸・投機事業による利殖により富を蓄積したという注目すべき見解も述べている。ここから著者は14世紀の転換期以降を、一面産業革命前夜のヨーロッパ経済社会に比定する。この点、第二次大戦後の一時期に中国・日本の研究者が展開した明末清初に商業資本の発達がみられ、江南などでは資本主義的生産の萌芽さえみられたという研究と一致したものがある。ところがこの段階に到達した中国の商業資本が一向に産業資本に転じない理由として、著者が提示した「高度均衡の行きづまり」という技術論・産業構造論では、その実態は理解しえても、その本質となるとなお考慮の余地があらう。そこで筆者のこの問題についての見解を述べれば、中国では資本の蓄積過程に国家権力が凡ゆる方面で関与していたため、自力での資本蓄積が不可能であったことが何よりも大きな理由であると考えられる。すなわち産業資本を担うべき階層であった郷紳・富農層は、国家権力のゆ着物として権力から郷村統治の権限を委任された形態で存在していた。一般に清代の郷紳は、官僚・高利貸・地主の三者一体であったと言われるが、このような形態を取らざるを得なかったところこそ問題の本質があるのではないか。郷紳は科挙が捐納によって官僚体系の一翼になったが、そこから必然的に郷紳は官僚体系に敵対するよりもそれを支持する要素として存在した。彼等郷紳の財政的基盤は、土地投資・金融・投機事業

であったが、それによる利得は官への献金や自己の消費に使用され産業基金に転じなかった。ところで問題は著者も述べているように、商業資本の展開につれ農民層の中から土地経営、商業活動を通じて上昇してきた富農であるが、これまた郷紳支配による鄉村統治体制の任務を分担することにより、その企業活動は制限された。ところで独裁君主権力は、その支配を鄉村の末端にまで及ぼす方策として、儒教モラルによる鄉村共同体の理念を利用した。郷紳は鄉村の名望家として郷民に尊敬されることを誇りと考え、郷民もまた共同体に奉仕することがモラルとして要求された。このような鄉村統治の形態が尤も明らかに現われているのが水利事業であった。清朝では水利事業は官の監督下に、郷紳が資金を負担し、佃戸が労働に参加するという形態が理想とされたが、ここには階級矛盾を調和して、地主も佃戸も一体となって共同体に奉仕することが要求されている。このようなシステムのもとでは、たとえ民富が蓄積されようとも、それが産業資本に転ずることはありえなかった。ところがこのような儒教理念に基づく独裁君主権力と、それを支える社会経済組織の崩壊が促進されるのは、やはり列強の進出により、中国が政治的にも経済的にもその影響を蒙ってからである。その意味で著者が中国に産業資本が勃興するのは、列強進出以後であるとのべているのは一応当てている。しかし著者には、列強の進出は、中国農民を列強資本のもとに隷属化させ、その隷属をはねのけようとする中国農民の闘争が、一方では明清以降、商業資本と結合した地主制度を崩壊させようとする運動と結びつく形で、中国の社会主義革命が推進されたという視点は欠如しているように思われる。

著者は結論で将来の中国について次の様に言う。すなわち「中国人民の技術的創造力は深い歴史的根元があったが暫くの間、実際の運用では眠っていた。それが今日徐々にめざましく、やがて吾々を驚かすことを望みたい。しかしながら中国農業は、巨大にして常に増加していく産業（工業）投入量を用いることによってのみ早く成長することができるのであり、それ故決して主要な部門であることはできないだろう。もしも工業が、農業・そして全体として経済を旧い高度の行きづまりから決定的に抜け出させるに十分早く進歩できるためには、これまで以上の広大な国際市場に入ることが必要になる。……しかしこれを実行するならば、中国共産党を本質的に存続せしめていた知識と思想の統制が瓦解することになる。このかくれた矛盾が、可能性として致死的であるか、単なるめんどうなものであるかどうかは、おそらくこの国のずっと先の未来のなぞである」と。ここにみえているように著者は、現在の中国に対して長年に互る高度均衡の行きづまり経済をいかに改革して経済成長をなすとげるかという点に関心を持っているようであり、そのためには伝統的な農村経済に依拠して成立した中国共産党の政策の転換が必要であろうと暗示している。しかしこれらの間に対して著者自身何も答えていない。但著者は歴史は現在を知り、同時に未来を洞察するために過去のパターンを追求するものであるという認識から出発して本書をまとめたようであり、近い将来に著者が本書の提起した課題を一層前進させた研究をされることを期待するものである。

(A5判、本文三一九頁、一九七三年、London, Stanford University Press)

(京都大学文学部助手)